

いのち折々

弘中千賀子



Fuchs 24

日伯文化連盟
日伯毎日新聞社

いのち折々

弘中千賀子

目次

- うた（二首）
- 心の旅人
- 茶に寄せる準二世の思い
- 母は想う
- ひいな
- 花どき
- 黄の花
- 出会い、三つ
- 春の思い
- 私事片々
- ことば
- 永訣
- いのち折々
- あながき

悔多き一世といえどこの国の

イツペーの花あふるるに遇う

(注・「心の旅人」から「花どき」までと「いのち折々」の六編
を収録しました)

心の旅人

びつしりと家々が軒をつらねている東京の街中を出はづれた列車の窓から、ちよつとした空き地ものがさないといった感じで稲田が見えてくる。それも人家の隙間すれすれの稲田である。東京を遠のくにしたがってその稲田が多くなり、広くなり、その合い間が宅地となつて、三、四階建ての団地が立ち並んでいたりする。列車の走つてゆく両側の稲田が、だんだん多くなり、見はるかすなだらかな山裾のこんもりとした木立ちの間に農家らしい家々が点在する。正方形、長方形、三角形もある田の畝がきちんとそれ



ぞれの所有者を区切っているのだろう。どの田にも畝から畝に、二、三本の銀色のテープが張ってあって、そのテープの陽光が風の中でキラキラと反射する。雀よけらしい。案山子替りになるのか案山子の数は少ない。みのり田、そうした言葉の浮んでくる日本の秋である。

それにしても稲田の間に時々野菜畑が見えるくらいで、農作物といえば目に触るる限り稲ばかり。豊葦原瑞穂国、なるほど、日本人は米食国民だったなーと更めて思い返すくらい他の作物は見当らない。

取り入れにはまだ早いのか、ほとんど人影がない。九月の初秋の透きとおったようなひかりの中で金色にたゆたっている稲田のなんと心和む美しさだろう。

幼ない日にこの日本を去って、四十年の歳月の後に訪れたふるくにで最初に心に染みついた稲田の金色のひかり。ブラジルでの四十年の日々の中で頑なまでに日本の言葉に執して来て、血という一面曖昧で不可解なものに囚われて来た月日の中で、文字の上での知識を辿り直してゆくよな、この度の私の日本の旅である。

赤や青のスレート屋根もかなりあるが、灰黒色の日本の瓦。そして生け垣。ひっそりと降る秋の雨。朝明けの空を、きまっつて一羽だけカーカーと哀調を帯びた声で鳴いてよぎってゆくカラス。日本だなあー。日本だなー、と心の中でつぶやくことばかりである。文通も殆んど途絶えた血縁が二、三いるばかり。遠い祖先の墓所が残っているばかり。近親訪問でも墓参でもない。長い間抱き続けて来

た自分の中の日本を確めに来たような主人と私の言わば感傷旅行でもある。

仙台を皮切りに回れるだけ日本中を歩き回ろうと、乗り込んだ列車の車窓に広がる日本の田園風景は、まごうことない日本の秋だった。生きる為の営みに段々押しよせられたように、列車の沿線のすぐそばに、一、二本の立ち木の蔭で、十基足らずの墓石の寄り集まっている墓地が見える。一瞬の間に陸軍歩兵上等兵何のなにがし、という文字が読める。立ち木もなくすぐそばまで四方稲田にかこまれて、ぽつんと四、五基墓石の立っている墓地もある。

秋の陽ざしを一杯浴びて、その明るさがかえって侘しい。自分の地所内で身内だけの墓地を持つ日本の習慣が、すぐには身に添ってこない。

松島、蔵王、十和田湖、奥入瀬、とお定まりの観光コースを皮切りに、時にはそれをはみ出して、古い日本を、古いものを、と訪ねて歩く、懐古趣味もいところである。点と線的な歩き方だけれど、ほとんど北から南まで、六十日間、吾ながら、よく歩き回った。まるで何かに憑かれているように。まるで意地になっているように。

四十年の空白を、二三ヶ月間で取り返そうとでもいうような自分の貪欲さが宿々の夜の眠りの床で時に愚かなものに思えてくる。長いところで三日、あとは一晩か二晩の泊りである。

遊女ではないけれど全く、”夜毎に変る枕の数“というところである。

毎日毎日日本の風物に触れ、歴史に触れ、日本の食物を摂り、どっぷりと日本に浸り切っているような日々なのに、夜の眠りに出て来るのは、きまつてコロナのことがかりである。

何も彼もブラジルのごことは心から切り離れたつもりなのに、夢の中には絶対に日本が現われない。口惜しい程である。なぜだろう。時にあんなにうつとうしかつたコロナのことが今はひどく懐しいものに思えてくる。

十月始めにNさん御夫婦と奈良で落ち合う約束になっていた。”秋の大和路を御一緒に歩きましたようよ“などという私の誘いが、少々お酒の入っている座のせいもあつて、”よし僕達も行こう“となんとなく話がまとまつてしまつての今回の奈良の出逢いである。

明日は約束の日という前夜、彦根から京都のホテルに電話を入れ、出て来たNさんの声がひどく懐かしく聞こえる。日本を尋ねにきてコロナの仲間を懐かしがる。心というものは勝手である。”ホリデイ・イン・キョウト“というホテルのロビーでNさんに会ったとき、私は思わず彼の方へ駆け寄つていった。彼の方も心得たもので、そんな私の肩をきゅつと抱いてくれたものの、後で一寸はしたなかつたなーとひそかに赤面した。それほど懐しかったのである。

日本の国の中で日本の言葉にかこまれ、日本人ばかりの中においても、心のつながりのないところ私たちはやはり一介の旅人にすぎない。愛し合つたり、憎んだり、反撥し

合ったり、すがられたり、そんな人と人とのつながりの中でしか、人は生きられないのかも知れない。

日本での日々が重なり、日本の旅が続く程に自分がこの日本で、もはや旅人にすぎないという思いが深くなつてゆく。もう自分がコロナ人以外の何者でもないという思い。にがくつても口惜しくつても自分の心の中に納得させなければならぬものなのである。

こんな日本に日本の風土を、いにしえの日本を、と探し歩いても、もはや自分たちが旅人の眼でしか日本を視ていない、ということに再び気づく。日本の日々の現象も、季節の移り変わりも、ここに根を下ろしている人たちの感じ取るものとは画然と異っている。

“帰らなむ、いざ”宿の夜の床でそんな思いがしきりに湧く。私の帰るところは、もうコロナ以外にない。

「同じ日本人にしても、それがどんなに幼い苗にしても、外国に移植可能な品種と、不適當な品種があると思うの。私などさしづめその不適當な品種の方で、つまり私の諸悪の根源は不適當な品種を移植したことにあるんじゃないかしら」 いったったか、こんなことを口走ったことを思います。

移植不適當だと思っていた私も四十年の歳月は、もう元の土に帰ることも出来ず、いびつな形なりに移植先の土に根を下ろしてしまっている。

十月末になって、広島から島根県の松江に向かう列車に乗った。山陽から山陰へ抜けるのだという。この沿線の

山々は、深紅、朱、黄、そしてみどりと晩秋の華やかな彩りの中にあつた。いかにも山国らしく、小さく区切られた段々畠の稲は、もうほとんど刈り取られて、稲束が高い木の棚に積み上げられている。稲架、こんな言葉があつただろうか。

脱穀のすんだ藁束を丸く積み上げて、てっぺんがとんがり帽子のようにしてある藁塚があちこちに見える。山国の秋の夕暮れはひときわ早く、畦道を姉さまかぶりの女の人があかをしんが小脇にして急ぎ足で歩いてゆく。中学生らしい男子、女子が自転車で帰宅を急いでいる。

やぶ蔭の農家から薄い煙が上っている。プロパン・ガスが普及しているといっても、農家では、まだ薪を使う煮たきもあるに違いない。胸を締めつけられるような日本の秋がそこにはあつた。

忘れようと努めても心惹かれてやまないような国と、愛さねばならない、という意識のもとで愛してゆく国と。今後こうしたものを、どのような形で私の中で整理していったらよいのだろう。

心の区切りつけて去りゆく遂に

吾が住むを得ざりしにっぽんの土

夜の七時、定刻通りに羽田空港を飛び立ったバリグ旅客機。座席の安全ベルトを締め終ると、自分でも思いがけなかつた程、涙が噴き上げて来た。

再び訪れる日はあるかも知れないが、もはや決してここに生きてゆくことのない地。私の子らやその又子らが生き継いでゆくこともない日本の地。ぐんぐんと高度を上げてゆく機の窓下には、まだ日本の国土の灯がまたたいている。

(一九七四年)

茶に寄せる準二世の思い



茶に寄せる準二世の思い

旅を続ける途中なのに……と渋い顔をする主人を横目に、仙台で買った南部鉄瓶のお湯が煮え立ってきた。お茶の湯には川水、それも朝あけのさらさらと流れる溪川の水がいちばんだ、などときくけれども、もとよりそれは望むべくもなし。

次が井戸水。義妹の家の掘抜き井戸の水をガラフォンに入れてきて、それがある間はいいけれどこれもいつものように訳にもいかず、リンドイアなどの鉱泉水はお茶を入れる

のには駄目、結局トルネイラ（水道）の水となるのだがこの水道の水でも鉄瓶のふたを除いてしばらく煮立てるとカルキ分でも抜けるのか、何んとなくお湯がやわらかい感じになるように思う。のつけからなんのことかといわれそうだが、私のたった一つの道楽ともいえる、毎日午後には飲むお茶の話なのである。お酒はもとより紅茶、コーヒー、などはあまり好まない私が、緑茶となると、あれか、これかと自分なりに工夫しては、少しでも美味しく飲む算段をす。お湯呑み、急須を揃えておき、沸とうしたお湯をまずお湯呑みに注ぐ。次にそのお湯を急須に移す、その急須のお湯をまた先のお湯呑みにもどし、温まった急須に適量のお茶の葉を入れ、行ったり来たりで頃合にさめたお湯呑みの湯をそそぐ。一寸置いて、急須をゆるく回すようにしてから、お湯呑みにお茶を注ぐ。私の愛用の急須は小ぶりの万古焼である。最初から、分量だけのお湯を急須に入れて、お湯呑みにお茶を入れ切ってしまうわなければ二杯目のお茶を駄目にしてしまう。こんなことは誰でも知っていることなのだろうけれど、こうして入念に入れたお茶をカシンギのもち菓子などを一つつまんでから口にふくむと、まろやかでほんのりと渋味を合んだ緑茶の香りが口中に広がってゆき、のどを撫でてゆく。

二杯目はやや熱目のお湯で……毎日のことだけれど、心がほんのりしてゆくようなひとときである。この緑茶、残念ながらコロナ製はとでも頂けない。これだけはどうしても日本ものでなければ駄目で、毎日のこの緑茶のたのし

みを途切れさせないように、少しでも新しいお茶を手に入
れようとする苦心をいとわない。お酒の好きな人がスコッ
チのよいのを求めるのに熱心なように、よい玉露やお煎茶
を求める手数はちつとも苦にならないものである。

こんな私の嗜好に案外同類がいるので嬉しくなつてし
まった。人文研の前山さんが私と全く同じ手順でお茶を入
れて飲ませて下さったときには、目が冴々とするほどうれ
しかった。

「前山のお茶の儀式だつて皆が言うんだ」と言いながら出
して下さったお茶は私のお茶と同じくらい美味しかった。
今年も竹茗堂の新茶の缶をわざわざ飛行便で送らせるよう
な彼。それ以来私は同志愛にも似た友情を前山さんに感じ
ている。もとより彼はお茶が好きだけでなく、お酒の方
がもっとお好きなようで、その方面には私は同志的なつな
がりはないけれど。

「コロナ小説選集が今日でき上がつて、パウリスタ印刷
所からコロナ文学事務所に四時ごろ持ってゆくから出て
来ないか」と前山さんから電話があつた日、「じやあ、お
茶持って行って美味しいお茶入れてあげる」「いいねえ」
ということになり、お茶の缶、お湯春み、お茶うけ、と包
みを作つて出かけていった。

“前山さんと、ここでお茶を飲む約束をしたの” “ナニ
言つてんのよ、この忙しいのに、お茶なら人文研に行つて
飲みなさい” “人文研に行くのなんとなく居候的気分にな
るんだもの。貴女にもお相伴させたげるから、ここで飲む

うよ” “勝手にしなさい、いい気なもんね 陣内さんとのこんな応酬も毎度のこと。前山さんを始め絵を描きにきていた星野さん、川島さん、武本御大、陣内さん、添田さん。ちようど来合わせた醍醐さん。狭いコロニア文学事務所は大入り満員である。” 疲れが取れるねえー、美味しい緑茶は” “体の疲れだけでなく、お茶って心の疲れも取れるでしょう” “ああ僕、心が疲れていたんだなー” “二杯目を飲み終った醍醐さんが、すかさず言う。こんな鮮やかな言葉の受け止め方がまた楽しい。

標語的に申そうなら、” お茶が広げる心の和” とでもいった雰囲気である。ずいぶん緑茶礼賛をしたけれど、緑茶に限らず日本的なものにばかりどうしてこう心惹かれるのだろう。

それも年を重ねるごとにその傾斜が強くなる。またしても、いわゆる戦前派準二世の世代の日本にいる日本人より日本的だと時に評されることがらの、その拠ってくるものを考えてしまう。

まるで自ら厚い垂れ幕を下ろしてしまったように日本にだけ目を向けて来たような生き方。

日本の文字によって、日本の言葉によってのみ知識を吸収し、大人になってきたわれわれ種族に共通の、一種の「かたくなさ」は戦前のまだ脆弱だったコロニア社会の創成期の中で培われたようである。文化的に日本の社会とば較ぶべくもないブラジルの奥地生活の中で、キング、講談倶楽部(早稲田講義録を取り寄せて独学したというのは恵

まれた方である。そういった読書の中で人間形成期を過してきたわれわれ世代の心の底に根を下している劣等感はやはり抜き難い。

必ずしも学歴というものを偏重する訳ではないけれども、同じ独学といっても、日本の社会機構の中での独学とブラジルのコーヒー園の中での独学とは同日には論じられない。自分というものが見えてくるほど、劣等感を探まつてゆく。こうした抜き難い劣等感（喪失感でもある）は文化水準の高い日本の社会の中で成人してきた人達には、ほんとうに理解してもらえないかも知れない。知識や智恵があつても自ら経験しなければ理解出来ない、といったことが、われわれの生きている周囲には沢山ある。一つの民族が他国へ移住し、融合してゆく長大な人間劇の中でほんの「つなぎ」の役柄しか持たなかった準二世という世代の心の格闘も少しは心に留めて欲しいと思う。

“日本へ行って来て思ったことなのだが、日本の人たちよりも、色んな点で日本的というより日本というものを深く考えていたとも言える。コンプレックスを持つことはないと考えた。” 準二世族である人の言葉には、あらたな矜持と共にその経てきた心の過程が感じられる。「ヨーロッパ観光つていうけれどヨーロッパに行くより、その分何回でも日本へ行きたい」。こんな私の言葉にしんから同調するのは必ず準二世仲間である。

ヨーロッパ文化に寄せるもの以前に、空白だった自分の中の日本を少しでも埋めたい、という探い心の欲求から出

ているのである。小さなことだが、こうした面にも、準二世的な飢渴感が感じられないだろうか。一世のたちが郷愁として持ち、二世たちが憧れとして持つ日本への思いとはまた異なる準二世たちが持つ屈折した思い。

うっすらと肌寒い午後。スラックスにブルーザの上に紺模様の半纏を羽織り、小説本を膝に、ソファの上でほんのりと口中にひろがる緑茶の香りを味わっている私の恰好は、まさに準二世的だと思うのである。

(一九七五年)

母は想う

カステロ・ブランコ街通を二十七キロほど走ってサンターナ・ド・パルナイーバへ行く迫へと右折すると、蛇行するチエテ川の流れるともなく半ば淀んで一いる水面に、水草が群生しているのが眼に入ってくる。化学廃棄物による水の腐った臭いが走ってゆく車の窓から入ってくる。この川に沿って、ゆるやかなカーブをもつ舗装道路は至極快適だし、左右にひらけてゆく眺望も至って爽やかな山野なのに、このチエテ川の臭気は公害々と騒がれる昨今の世の味気なさを身近にひきよせる。



サンターナ・ド・パルナイーバの町を過ぎ、しばらくしてピラポーラ・ド・ボン・ゼズスという教会のある同名の町に入る。この教会は大へん霊験あらたかだそうで日曜祭日ともなると団体バスで乗りつける参詣人であふれる。チエテ川沿いに立ち並ぶ家なみと堀割りに似た川ぶち。素朴な遊覧船も行き来しているこのたたずまいが私の記憶のどこかに持つ風景に繋がっていて、この町を通るたびに、いつもふっと物哀しく懐かしい気分になる。それからしばらく灌木の多い原の中の道を走ると川に沿った道の兩岸に山々が迫ってくる。石ころの多い川床を流れる水と木々の繁った高い山にはさまれた道。日本の山道に似ていて車で二十分ぐらいの間だけけれど舗装の傷んだ、ひんやりしたこの道は日本を身近にひき寄せる道である。

「似てるねー」「似てるわねー」主人と一度は必ずこう言い合うところでもある。

山が切れてくると竹藪があったり、アラマンダの花垣を持つ農家、ピంగా工場、などが望見される。このイツイ市への旧街道は私達の好きなドライブ道である。主人と二人、言葉少なく草を走らせていると頃日の思いがまた心を占める。息子の見せた真剣な表情が思われて愛憐としか言えないようなない思いが胸をつく。

「お母さん、僕、ベッチと結婚します」ぴたっと私の目を見詰めて言った顔。

「そう、あんたが決心し、うまくやってゆける自信があるのなら賛成します」

潔く私は言ったつもりなのに目から涙がぼたぼた落ちる。こんな時涙をこぼしては息子に悪い、と思うのに、どうしても止まらない。息子がこの言葉を口に出すまでの心の経緯やその兄の心遣い。夫と二人の息子が一緒になって私のシヨックを少なくしようとした謀議ものに主人から聞いた。

固陋頑迷。まるで明治の頑固親爺のような立場に私が立っていることも知った。息子が選んだエリザベツチという娘は、アラブ系の父、イタリア系の母を持つ二十四歳の娘である。

この娘と交際していることは知っていたし、ある程度覚悟はしていた。考えてみればこんな覚悟を必要とする私がすでにおかしい。十歳未満で渡伯し、ブラジル人的なもの自身につけなかつた自分の方が変なのである。日系の子であろうと同じブラジル人として、娘の選んだ相手として喜んで受け容れているあちらの親連のこだわりの無さが当然なのである。人間が生まれ育った風土と環境というものは、これは決定的なもので、この国で生まれこの国土の中で生い立ち、この国の社会環境の中で成人して来た息子たち。何系であろうと容貌の差こそあれ、彼らにとっては何らの違和感もない同国人なのである。日系二世同志の間でもその共通語はポ語であり、風俗習慣、思考の形態も完全にブラジル人なのである。日系として日本的なものへの志向を持つといっても、それはあくまで他国の文化としての摂取

の仕方であり、接し方なのである。我々のように自分自身のものとしての受け取り方とは画然として異っている。このような当然なことに今更思い至るとき、たとえわが子であつても息子は明らかにブラジル人であり、私は遂に日本人なのである。

息子が他系のブラジル人の中から生涯の相手を選んだとしても何んの不思議もないこと。

民族の血に於ても少数が多数に吸収されてゆくのは当然の帰結である。たとえ息子の代でそうならなくとも、三世、四世の代にはブラジル民族の中に溶解してゆく私達の血である。何を動揺することがあるだろう、と理性では私にだってよく解る。ただ私の中の日本人が内容はどうあれ、同じ容貌を持つ日系の娘を嫁にとのぞんで来たのである。

いまだ心が揺れ動いている私の目にも右折し左折する山道の木洩れ陽ざしは美しい。息子が結婚の決意を表明した旬日後”彼女の大学の卒業式に列席して欲しい、その時あちらの両親に紹介するから”と言われて主人と二人で出かけた日のことを思い出す。列席者が一杯に詰まっている講堂の座席の中央通路を今日の卒業生達が黒と白の例のガウンのような式服を着て列を作つて入ってくる。息子の彼女に会うのはこれで三度目である。粉飾の無い少女少女したごく普通の娘である。列の五、六番目だったろうか、やや照れたその顔が目に入ったとき”けなげな”ふっとそんな思いが湧いて涙がにじんできた。息子の結婚を認めたとはい

言え、まだ心の整理が出来ているとは言えなかつたのにもうこの娘が特別のものとして目に入ってくる自分の心の動きが意外だった。

イツー市に近づくると川にダム様のものがあつて一旦そこで堰き止められた川水がやがて滝のようになだれ落ちる個所がある。下方はサンパウロ市で廃棄された洗剤の白泡がぶくぶくと盛上つていて折々の風にその白泡がまるで大型のぼたん雪のように舞い上るのが遠目にはむしろ美しい。「大分おながが空いてきたわね、今日は何にする？」通称レストランテ・アレモンと呼んでいるイツー市のドイツ人経営のレストランはマッサ類が美味しい。土・日曜には整理券無しでは食べられない。客は殆んどサンパウロ市から来た人々である。木立の多い道が終つて、昼近い陽ざしに坦々としたアスファルト道が続く。

一人前になつた息子達はそれぞれの道を自らの意志のもとに歩き出している。動物の世界に見る巣立つた子らを振り切る、あの容赦の無さに比べて意識の上でも生活の上でも、キリもなく子らにまつわりつこうとする愚かさをふつ切りたい。一世達がどれ程の決意と覚悟を持ってブラジルに移住して来たかは知らない。だが他国に移り住むということとは自分の子を他国の民とすることであり、子々、孫々、もはや日本人であることを断念するということでもあつたのである。その一世達に連れられて渡伯した来た吾々準二世層とは、そうした親達の行為を否応なしに受け

継ぎ、日本人として最後の締めくくりをする世代でもあつた訳である。準二世の私が吾が家に於ける最後の日本人であるなら、徹底的に日本人として生き、どこ迄も日本的な心情の中で死んでゆこう。ひそかに思い決めた私の“末期の眼”に映る日本の言葉のひとつひとつが。古い日本の風習の愛しさが探い翳りを帯びて私の心を惹き寄せてやまない。照り翳る心を持ちあぐむ頃日の私の目にも、広い空に拡がるブラジルの春の花、ジャカラランダの薄紫の淡いむらがりや、広野を彩るイツペーの花の鮮かな黄の点綴は、やはりこよなく美しく映るのである。

(一九七六年)

ひいな

一月から二、三月にかけて紫と白二色のさわやかな染め分け模様のクワレズマの花が咲く。

アンシエツタ街道取海岸山脈にはこのクワレズマの木が多く、その花どきはサントスへ下る道をたのしいものにする。サンパウロ市とベローロ・オリゾンテ市をつなぐフェルナン・デイヤス街造もみどりの深い両側の森林にクワレズマの集落が多く、やはり眺め多い道である。

四月はまたパイネーラの花の季。

胴の太いパイネーラの木は見るからに頼りがいのある暖い感じである。うす桃色のその花は少し距離を置いて見上



げると、ひととき美しい。木も花も暖色である。その次が
イツペー。

私の一番好きな色、黄色である。広い山野と深々とした
冬空を背景にイツペーの木は一枚の葉も残さない枝々に
くつきりとした鮮やかさで黄の花が一せいに咲き競う。全
く目を洗われるような、という形容通り一点のかけりもな
い明るさである。イツペー・ロツショと云われるというよ
り桃色の濃さに近い花を持つイツペーの木もあるけれど、
イツペーというと黄、とすぐに結びつけてしまうくらいサ
ンパウロ州には黄色の花のイツペーが多いようである。

そうして暦の上に春が来ると、ふんわりと夢のように頭上
にひろがるジャカラランダの花どきが来る。サンパウロ市の
古い街路樹に多いこの木。沢山の花を散らせながら次々と
咲きつづけてゆくジャカラランダ並木は、舗道の上にやさし
い筒型の花を敷きのべて、踏むには惜しい、うすむらさき
の花の絨毯である。

「ブラジルって木に咲く花の多いところですね」

「ブラジルってところ始めは中々馴染めなかったのです
けれど木に咲く美しい花が多くて此頃好きになりました」。
日本から来て間のない人、二、三からこんな言葉を聞い
た。

「草花よりも木に咲く花が好き」

という人が私の周囲には多い。木に咲く花の持つ一種の
凛々しさが好ましいのだろう。

もう二十年來の習慣となっっている早朝四キロの速歩。ア

クリマソンの公園の池に沿った径にはいまジャカラランダの花が咲き始めて、日毎に淡いむらさきの翳りを深くしている。かなり古木の枝々がうすむらさきの花におおわれている。亡き玉木勇治氏のジャカラランダのある風景画を思い出す。たそがれの空を背景に、ずっと立っているジャカラランダの木の梢にうす紫の花がひらいている。その花の沈潜したはなやぎのいち。

印象深い絵である。この絵は現在脇坂勝則氏の所蔵になつているときく。

木に花咲く季をめぐらせて永い歳月をこの国で生きて来た。他国に移り住んだ者の屈折多いところはきまりをつけようもないままにやがて終ろうとしている。

とりとめもなく過ぎてゆく日々の中で先日ふとしたことから、にっぽんの雛人形一揃いが手に入った。伊勢丹デパートの包装のままブラジルで取り出す折もなく五年間そのままにしていたのを帰国を前にゆずり度いという方に会ったのである。私にとっては、かなり荷の重い値段だったけれど、すぐを買う気になった。日頃つましい私には似合わないためらいのなさである。大きなダンボール三個に入れてある人形たちは一つづつ白い和紙で貌と手がくるんであつてその上をやわらかい紙で包んである。三月には末だ間があるけれど一度飾って見ることにした。組み立て式のスチールの段も赤い毛氈（もうせん）もついている。「大内雛」と書いてあるこの雛（ひいな）たちは平安朝の古雅

な面ざしを持っている。

内裏さまを始めとし、三人官女、五人囃子、左大臣右大臣、衛士三人、その他御駕籠、御所車、ともろもろの道具類。七段の雛段にきつちり置く。

金屏風の両脇に小さな電球の入っているぼんぼりを灯す。灰かな灯あかりが、ひいなたちの横顔をかげらせている。三月の桃の節句に“一年に一度箱から出して上げないとお雛さまたちが泣きますよ”と幼い女兒に語りかけながら、につぼんの母たちが雛壇に飾りつけたひいなである。「雛あらば娘あらばと思いきり」という子規の句があった。娘も持たなかったけれど、幼い移民私には無縁だった、みやびやかなひいな遊び。

私の息子たちの幼い二人の娘にこの雛人形を遺しておき度い。この子らが、ものごころついたとき、につぼん人であった祖母が遺していったこれらにどれだけの関心を持つてくれるだろうか。風土も生活習慣も異なるこの国に生い立つこの子らが、につぼん的な情緒や古いにつぼんの生活のこころを十全に感じ取ってくれるとは思えない。彼女らにとつては単なる異国の美しくい人形たちであり、祖母の国のやさしい伝統の行事だという興味だけで終ってしまうだろう。

だが今の私は幼ない孫娘たちに遺す私のひいな、という感傷に手ばなしで溺れている。

ひとつの国から他の国に移り住んで地縁血縁のなかで、みづからの国として生きてゆけるには、三代、四代も経な

ければならないだろう。日本からもブラジルからもはぐれてしまった私の哀しみなどにかかわりなく、子が孫が、そのまた子らが安んじてこの国に生き継いでゆく遠い日。安堵と淋しさのぬい交ったところでそんな遠い日のことも思ってみる。

(一九八一年)



花どき

また巡って来たジャカラランダの花の季節。

淡いむらさき色のこの筒状の花が梢いっぱいには咲きひろがっているさまはいつもながら好ましい眺めである。

乾期とは名ばかりで、雨の多かった今年のサンパウロ州。

そんな天候がジャカラランダの開花にどのような影響を与えたものか、今年の花のひらき方は例年に較べて淋しい感じである。

あのジャカラランダの木の下一杯に薄むらさきの絨毯を敷

きつめたような落花もいたって少なく、遠目にも梢にひらく花々がぱらりとした感じで、こんもりしたうすむらさきのひろがりの美事さは逐に見られず季が移ってゆきそうである。

だいたい今年にはつらい年だったようでイッペーの冴々とした黄の花もあまり見かけず、紫というより桃色に近いイッペー・ロツシヨの華やかな花も殆んど見ることなくて終りそうな今年のサンパウロの春である。

もう十数年来の習慣である早朝の散歩。

アクリマソン公園の速歩の径のジャカラランダ並木も曇天の日の多い朝々の空を透かして見上げる梢に、それでも、いま頃は勢一杯の花をひろげている。

この公園の一劃にくろずんだ葉の色を繁らすユーカリの樹々に背後を包まれるようにして立ち並ぶ三本のジャカラランダの木がある。

花どき、そのむらさき色の影が前面の池にうつっているのを対岸の径から見るのは実によいものである。

ユーカリの葉のくらい色をバックにむらさきにひろがる花の色。

それを映す池の面は池水を深々と見せる。

年毎のこの沈潜した華やぎの色に遭うたびに、思い出すのは、寿永四年、源平壇ノ浦合戦での平氏滅亡のとき御母建札門院平徳子に抱かれて入水した幼い安德帝が船の上で「海の底にも都があるのか」と問われ、侍る者らの涙を誘ったというその言葉である。

西国に落ちのび遂に都へ還ることなく終った幼い帝。

華やかな宮廷栄華を繰りひろげた平代一門の都での日々と、その滅びの日と。

アクリマソン公園のこの小さな池の面に映える、ほんなりとしたジャカラランダの花の色は私にいつもこんな連想を呼び起こさせるのである。

この公園の朝の速歩の時、住所も名前も知らないまま、挨拶を交し合ってすれ違う幾人かの人々が出来ていく。

もう何年となく毎朝顔を合わせる間柄で、一種の仲間意識のような親しみがお互いにある、一々二日誰かの顔が欠けると気にし合うようになっていく。

ところでこの散歩仲間にもゆるやかな交替があつて、梨の接木の上手だったというAさん。かつて奥地で長いこと日語教師をしていたというBさん。「僕は歩き方の専門家でしてねー」と言い足の運び方について、ひとしきり講釈を述べていた愛嬌あるホラ吹きCさん。みんな一人づつ一人づつ亡くなってしまった。

娘さんを交通事故で亡くされてから散歩に現われなくなったDさん。大学卒業間際の息子さんをやはり交通事故で失ったけれど人前ではいつも瓢箪で人を笑わせていらつしたIさん。

そうした人たちともいつしか会うこともなくなった。お互いに約一時間の速歩が終ると、「お休み処」と称する

特定の石のベンチに寄って五分か十分位のおしゃべりに興じ合っていた集まりも無くなって久しい。

花は相似るとも人は老いてゆき、離合集散、定まることのない人の世の営みがここにもある。

最近この散歩時間に韓国系の人があふえて来た。四、五人づれの男の人。中老夫婦。女性ばかりの連れ。池をめぐる散歩道ですれ違う顔ぶれは多彩である。

いつとはなしに挨拶を交すようになったのだが、ブラジル人たちは「ボン・ジーア」「ボン・ジーア」と言い合っていてゆくのに、この韓国系の人たちとは「おはようございます」と日本語で挨拶をする。「おはようございます」と声をかけ、「おはようございます」と明晰な発音の声が返ってくるたびに、いつもなんとなく悪いような気がするのである。こちらが日本人だから、と一方的に日本語での挨拶を押しつけているような一種の後めたさである。

この人たちは、たいてい中年以上の年輩で、かつての支配者日本と被支配国の民であった日の名残りである彼等の上手な日本語。この人たちの心のどこかに、そんなこだわりがないだろうか。

「おはようございます」と自分の国の言葉で声をかける私たちの心の中に無意識な優越感がひそんではないだろうか。或いは相手にそんな思いを抱かせてはいないだろうか。

「アンニョン・ハシミカ」 いとも気軽に韓国語でこう挨拶

してみたかどうかしら……。

「おはようございます」 「おはようございます」 明るく元気な声が返ってくるたびにこんな思いが心をよぎる。

ユーカリ林の中の道は散歩やジョギングのために作られている道で約一キロの道のりが曲りくねっている。大小の起伏が多く、のぼったりくだったり、急いで歩くと汗ばむ砂利まじりの土の道である。

かなりの樹齢を持つ太いユーカリの木も大風や大雨で倒れたり枯れたりして大分木立が薄くなったし、木下の草も以前ほど密生することなく、一杯に朝露を合んだ草のやわらかさを目にすることも出来なくなっただけに残っている木々のがつしりと根を張ったその盛り上りや、新しい樹皮に包まれた幹の感触はやはりよいものである。

この木立ちから見るとその周辺の遊歩道と人影。やや高くなっている木立ちからの視界はこの公園を広くのびやかに感じさせる。

ところでこの木立ちの中のユーカリの木の根本に時々マクンバの祀りの跡が残っていることがある。お供えのガラナやピンガのびん。紙盆に残るポーロ（ケーキ）のたぐい。アフリカ渡来ときくマクンバという宗教がどのようなものかよく知らないけれども、主として人間の愛憎にかかわる呪術的なものだときく。日本にもあった。丑の刻参り“藁人形を憎い相手に見立て五寸針を打ったとかいう、あのたぐいなのだろうか。

憑霊、憑依そんな言葉が思い出される。

人間の棲む処、いずこの地にもある人の世のどろどろとした思念が生んだ宗教なのだろう。

やはりうす気味悪くって、そんなマクンバの祈りの跡は遠くよけて通りすぎる。

マクンバだの丑の刻参りだのという陰湿な宗教にくらべて日本の稲荷大明神というのは、どことなくユーモラスでとばけた明るさがあって好感が持てる。

それで思い出したのだが、先頃の訪日の際、実に面白いと思っただことがある。

ブラジルのパペロッキ社の関連会社である丸三紙業株式会社へ案内されたときのこと。この会社は日本橋の小伝馬町にある。(江戸の頃小伝馬町といえは牢のあったところではないかなどと時代小説からの知識が頭をもたげたものだが……) この辺は勿論第二次大戦のとき米軍の東京大空襲で灰塵になったところであろう。

今は大小のビルの建ち並んでいるオフィス街である。

高みにある丸三紙業の三階だったか四階だったのか応接室の広いガラス窓の右手の方角に五く六階建てのビルがあつて、屋上に赤い鳥居の小さな社が見える。

なにをお祀りしてあるのだろうと眸をこらして見ると小さな幟なども可愛い社殿の両脇に立てられてあり、どうやら稲荷神社のようである。

さすがに油揚のお供えまでは見えなかつたけれど近代的

なビルと、その屋上の稲荷神社はまことに興味深い取り合わせであって、さすがは日本、さすがは小伝馬町内のビルだなあーといたく感心したものである。

後日、本より得た知識では、おいなりさんは産業の神様で日本ではよほどのつむじ曲りでない限りどの会社でもおいなりさんをおまつりしてあるという。

産業立国、高度の近代技術を駆使して経済大国を築き上げた、その担い手である日本の会社のほとんどに稲荷大明神がまつてあり、各会社の社長さん方が毎朝あぶらげを供えて柏手など打っているのだろうか、想像するとなんとなく楽しくなってくる。(おいなりさんにお詣りするのに柏手を打つのかどうか知らないが)。

毎日の早朝の速歩の道でとりとめもなく心をよぎるさまざまな思い。石鹸の泡のように次々と浮んでは連えてゆく思いだけでも、気がついてみるとこんな泡のような思念の中でも必ず日本というフィルターを通して、或いは日口本的なものとの比較、対照の中でしかものを考えない自分。そこで生まれ、幼い一時期をすごしただけの日本が私の中に抜き難く居座っているということ。

それにつれてまた思い出したのは「短歌」という雑誌の何月号だったのかの上田三四二氏と辺見じゅん氏との対談の中の上田氏の言葉である。一寸抜粋させて頂く。

上田「疎開児童の調査ですけど、幼ない頃に行って何年か暮した人はその土地の影響があるんですね。もうちよつと年がいつてから、まあ小学校の上級か中学ぐらいに行つ

た人はあんまり影響を受けないといわれています。物心のつき始めた頃に行つて、育つた人は影響がつよいですよ。あなたの場合は実際の郷里だし、そこに育たれたから「雪の座」を読んでもやはりそういう性格、人間形成の――人間形成とまでいわない。もうちよつと以前の情操の基本には何かそういう風土がある？　ご自分ではどうですか」この言葉を私は自分の場合に引きよせてみた。

十才足らずで去つた日本の風土が私の生涯の資質、性向を形づけてしまつてゐるということ。

それはもう何十年他国に生きつづけようと染め替へることの出来ないものになつてゐるということ。

他国で生きつづけてゆくべく連命づけられた者にとつて、それは決してプラスではなく負の要素であらう。

コロニアの中のいわゆる準二世とよばれる者たちの同じ傷みを頷ち合う戦友のような意識の中で自分たちがその負の要素に徹するより他はない、ということをお互いに痛いように感じ合つてゐる。

そんな吾々がこれからも自らの中で日本とブラジルをどのように受け容れ、どのように納得づけてゆくものか、それは生きてゐる限りの私たちの生の課題のひとつでもある。

(一九八三年)



いのち折々

ガラス戸を開け放ったテラスから、朝の陽が深く射し込んでいる。暖い。

テラスの向い側のアパートの窓々も一杯に陽を受けている。朝陽を受けた白壁が、くつきりと際立っている。

三人の孫たちは学校へ、息子は入院患者の待つ病院へ、嫁は大学へ授業に。皆出かけた家内はひっそりとして、台所にいるお手伝いさんの立てている物音がドア越しに時折り聞こえる。

張り出したテラスを囲んで横長の植木鉢があり、ジャス

ミン科の白い花。つりがね草のような赤い小花のゆれる木。常緑樹の厚手な茎をつけた小さな木。その他いくつかの植木がつつましく朝陽を浴びている。

ブリガデイロ、ルイス、アントニオ街を少し入った街路にある息子のアパートである。

こんな街の中に、どこから来るのか、蜂鳥が小さきみな羽音を立てて植木によってくる。

可憐な小鳩が、すい、と来て、さつと飛んでゆく。見上げる空は倦んだような青さである。

つい、と黒鳥が一羽視野をよぎっていった。

左足首を骨折して一ヶ月。息子のアパートのサーラ（客間）から毎日見上げた空であり、小さな植木たちである。白い小花は風が吹くたびにかすかな、よい匂いを漂よわせる。

街の中のこんなにささやかな自然が、優しく心を撫でる。時間の流れが実におそい。

骨折した足を動かさずに、ただ時間がたつのを待ただけ、という日々である。

後五ヶ月で満六十九才。私の人生に与えられた、なすべきことは全てなし終えたような、かたのついた気持である。そんな思いの中で、もの心ついた日からの私の生涯が浮んでくる。

脈絡乏しいのだが、一つ一つの記憶の断片はいとも鮮明である。

いま私の人生の終章を締め括るに当って、そんな記憶の

断片を綴り合わせてみたいと思う。

ブラジルを祖国として生まれた孫たちが、そうしてその又子らが、いつの日か東洋の一島国から移って来た祖母が、曾祖母が、ブラジルに移り住んだ日々の想いの、その万分の一でも垣間見てくれたら……。そんなひそかな願いも込めて私の人生の小さな回想記を書いてみよう。

部屋の窓枠にやっと手が届いて不安定な形で立っている私に窓の外の鶏がよって来た。手をつつかれるのではないか、という恐怖がさつと心に拡がって泣き声をあげた私を抱き取ったのは、母だったか子守りだったのか。

これが私の最初の記憶で三才位だったと思う。襖を払った奥の座敷で、まもなく亡くなった父なる人が病臥していた蒲団をかすかに憶えているが父の面影は定かでない。

その頃、日本国の管轄下であった中国の旅順にあつた関東庁の若き官吏だったという父。

奈良県吉野郡の生まれで奈良中学を卒業したという。その後上級学校へ行けたのかどうかは知らないが官吏となり奈良県庁から山口県庁へ転勤となり、山口県の生まれである母の養子婿となり宮本姓から佐伯姓となった、いきさつは知らない。やがて旅順の任地で夫を亡くした母は七才、四才、赤ん坊の妹、と三人の幼児を連れて母の妹の住む東京へ移り住んだ。

下落合というこの叔母の住所が記憶に残っている。この叔母は私たちの渡伯直前に亡くなった。

仲のよかつたらしい妹の死が母のブラジル移住の一因になつてゐるかも知れない。

この叔母の連れ合いがやはり遠縁の人で遠い血のつながりがあり、二十年前主人と日本へ行つたとき訪ねていったら、実の甥姪を迎えるような悦び方を見せてくれた。

この叔父はどういうわけか冴えない女の子だった私を可愛がつてくれて、母がブラジル移住の決意を打ちあげた時、「千賀ちゃんを自分のところへ置いてゆけ」と言つたそうである。

もしあの時私が日本へ残っていたら……。ブラジルに住む日々の中で鳥影のように時々意識をよぎる、「もしも」である。

ところで東京で私は尋常小学一年生となる。母と三人の幼女の住む借家の表札が佐伯寓となつていたので憶えている。二年生の終業式が終つて間もなく母の郷里の山口県へ歸つていった。山口県向津具村、というのが母の生地である。

小さな一寒村だったが母の両親の代までは、この小さな村の庄屋だつたとかで、明治のその頃の寒村には珍らしく女学校を卒業したというのが母の唯一の心の支えでもあつたらしい。

女学校へ行かせて貰つた代りに嫁入り仕度は一切無しだつたと時に母は女らしい愚痴をこぼしたことがある。

母の郷里に住んだのはほんのしばらくの間で今度は同県の萩市へ移つた。

明倫小学校へ転入学。そこが日本での私の最後の学校となる。

吉田松陰の松下村塾を持つ萩市。維新の元勳を輩出したところ。などと先生は事あるごとに生徒達に話していた。

この街で後に私の夫となった弘中の父に母は再会する。やはり遠縁だという。

もとを手操れば日本人全部が血縁であるような一島国の中の村のつながりである。

弘中の父も私の母と親の決めた許嫁だったそうだが、お互に違う相手と結婚し、何十年か経て、やもめとなって下関の税関を止めたばかりで男子一人女子一人の子供を連れて弘中の父と三人の女兒をかゝえた母とが再婚し、その頃、鳴りもの入りでブラジル移住を勧めていた県庁の宣伝ポスターやブラジル事情講演会などに行き、働き手の少ない家族なのに、二人がブラジル移住を思い立ったのは、どのような動機だったのだろうか。果物が豊かに稔るコーヒーの国ブラジルへ、という熱はかなり広がっていたらしく、四月十二日萩駅を出発するブラジル移住団だけでも相当な家族数だった。

昭和九年、日本は不況の真っ只中。満州事変、日支事変、と広がってゆく戦争へのおびえも徴兵年齢にあった人たちを浮き足立たせていた面もあったかも知れない。

事実移民団の中には徴兵延期願いを出した若者も多かったときく。

その頃、大ぴらにそんなことを言えば非国民と云われたであろうが…。

弘中の長男も下関商業学校を卒業したばかり。近い将来徴兵されることは確実であった。

その後の何度かの戦場で命を失う確率は八十パーセント以上であつたらう。

長い長い戦火の時代を避けて、いのち全う出来たことを喜ぶべきかも知れない。

凄惨な戦いを経て復興してゆく日本。その復興の力の一つともならなかった他国へ移り住んだ私たち。いま豊かさを享受する日本の人たちを羨望するのは、心にためらうものがある。

だが異国に移り住む、ということは、自分自身の人生を根底から揺り動かす事柄である。

二、三年したら錦衣帰郷を、というのは所詮移民たちの夢に過ぎない。移民たちの何パーセントがその夢を實現出来ただらうか。

さまざまな社会的条件の中で、この地に永住し、子孫をこの国の人とすることになった思いの深さ。国際化が云われ、地球的規模での人間同士と云いながら、生まれた国への帰属意識や血というものにこだわり続ける人間。

私たちが一生かけても抜き去ることの出来ない日本人であるということ、これもどう仕様もない心の問題なのである。

行け行け 同胞海越えて

遠く南米ブラジルへ

御国の光り輝やかす

今日の船出の勇ましき

万歳 万歳 万々歳

こんな威勢のいい歌で、不況のどん底にあった日本から押し出されてゆく人たち。

出来たての混成家族にも似た私たち一家を含めた移住者が乗船したのは、「もんでびでお丸」といった。四十五日の航海を経て、サントス港に着いたのが五月半ばだったか。そこから黒い煙りと火花を盛大にあげる汽車に乗り、サンパウロ州ノロエステ線カフエランジア駅平野植民地へ。

あのコロニア開拓史に残る平野運平氏の拓いた植民地である。

私たちが入植した頃の平野植民地は、いま言えば最盛期で、コーヒーは豊かに稔り、果樹園には柑橘類がたわわに実をつけていた。

耕主の殆どが日本人であり、日本語学校があり、米、味噌、醤油を売る組合の売店もあって日本語だけでも暮しをゆける植民地であった。

日本の小豆島の出身だという藤沢醤油醸造所の主人の耕地が私たち一家の配耕先だった。

モヂアナの石ころの多い耕地に配耕されて苦勞した話などに比べれば、いくらかはよかったかも知れないが労働力の少い子僕たちをかかえる吾が家の暮しがきびしいものであったことは想像出来る。

十才の私と七才の妹は植民地の日本語学校へ通わせてもらえたが姉たちは、その日からコーヒー園の仕事についていた。

移住初期の人たちが一度は通る激しい失意と悔恨を経て、少しづつ少しづつこの地の生活に馴染んでゆく。

コーヒー樹間の山立て、採集。開墾地の山伐り、山焼き、綿つみ、除草、短い期間だったけれども私もその労働に参加している。

コロノとしての契約二年目が終る頃、義父の長男である弘中がリンス市の東山銀行の試験を受けて入社。月給の中から月々仕送りをする、という条件で農のくらしから離れていった。

義父と母と私の姉と義父の娘、私と妹。女ばかりの至って心細い農家ぐらしである。

だが、すすくと伸びているコーヒー樹の間には自然生えのマモンが熟れ、西瓜もいつしか育ち、野菜畑の野菜の成長もよく、食べるにこと欠かなかったのは土を相手に生きる者の強みであったろう。

母たちも村の菩提寺の世話方などにいつしか納って、村のおつき合いの中に溶け込んでいった。

リンス市へ出て行った義兄である弘中が毎月送ってくれ

る日本の月刊誌。日本から持って来た古雑誌や単行本の一字一字の活字をまるで吸い込むように読み始めたのは、そんな暮しの中でだった。

限られた書物ゆえにこそ、繰り返し繰り返し読んだ。

「読書百遍義自ら見あらわる」とはまことで、難しい言葉や文章もいつしか理解出来るようになる。

主婦の友、キング、改造、などという雑誌類から、田山花袋の「蒲団」吉屋信子の少女小説、と全く目茶苦茶な乱読である。

後年、私と同世代である、いわゆる準二世が、その頃早稲田講義録を取りよせて勉強したものだ、という話を聞いたときそんな恵まれた人もいたのか、と驚いたものである。この世のすべてに生々とした好奇心を持ち知識欲の最も旺盛な年頃にあった者たち。

在伯日本人の眼がすべて日本へ向けられていた時代でもあった。何時の日か必ず日本へ帰るのだ、というのが日本人移住者すべての願いでもあった。

私の興味や欲求のすべてが日本のものだったのは、そうした周囲の大人たちの空気も与っている。

時々植民地へ帰って来る義兄が、

「君が十八才になったら僕と結婚しようね」

と言ったのは何時だったか。やがてそれが実現して、満十八才に半年足りない頃、義兄は私の夫となる。

東山銀行サンパウロ本店勤務となった夫に連れられて、熟れ切らないキヤボ(オクラ)のような青く細い田舎娘の私

が人妻となり、やがて母となつて、もたもたと失敗を繰り返しながら、なんとか大過なく歳月がたつていったのは、いま思い返しても僥倖と云うほかない。

十才そこそこで移つて来たブラジルはいつまでたつても異国である。

邦人社会という小さな囲いの中でブラジル人社会とは、いとも縁うすく過ぎてゆく日々。

そんなくらしの中で、いつしか三十一文字の短歌の持つ最も日本的な韻律に惹き込まれてゆく。

世間とのつながりの狭い日々の中で、自分一人の思いを託すのに、こんなに都合のよい詩型はない。

「言霊の幸ふ国」の言葉が持つ拡がりや深さと。

私は自分に問い、自分に答えつつ、自分というものをひたすら短歌に詠みこんでいった。

コロニア社会での唯一の短歌誌「椰子樹」の存在も知り、入会してからの私はいつそうこの誌型に溺れ込んでいった。

短歌を通じて得た人と人とのつながりも私の交際範囲を豊かなものにしてくれる。

親としてまことに未熟な私だったが、二人の息子もいつしか成長し、二人とも自ら医学の道を選んでいった。

そうした歳月の中で最も私の心を苛み続けて来たのは準二世というまことに曖昧な場に立っている自分の姿である。

基礎的な教育を逐に受けることなく、偏狭な独学とも言えない日本語の知識で、三十一文字の詩型に思いを込めてゆく作業も、また心忸怩たる日々である。

劣等感のかたまりのような心の中に潜め持つ反発の心。自ら選んだものではないにしる苗木のうちに他国に移し植えられて、そこで日本在来種のまま根を下ろしてゆかねばならなかった心の葛藤と怨念は私たち準二世と呼ばれる者すべての思いである。

準二世という自分の立場にこだわり続けて何十年か。いつしか人生の終章期に立っている自分の姿に気がつく。人生の戦友でもあり、庇護者でもあった夫も一九九〇年、七十五才の生涯を終った。

二人の息子もそれぞれ家庭を持ち、子をなしている。私なりにすべて此の世での務めが終つたいま、かえり見る私の人生のなんとささやかなことだろう。

準二世であったことの身を灼くような焦慮感もいつしか薄れて、子や孫やその又子らがこれからの世界をどのよう_に生きて行くものか、もはや私の想像の及ばないところである。

遠い日本の血を享けた子孫たちが、そうしたことをどれほど意識して生きてゆくものか、これもすべて私の思い及ばぬことである。

いまは只、私の遠い血の裔が、時に日本という国へ思いを馳せ、穏やかに生き継いでゆける世であることを希うのみである。

(一九九三年)

あとがき

昨年の半ば頃、日伯毎日新聞社のポ語欄の大井セリア編集長の訪問を受けた。

日伯毎日新聞社四十五周年記念行事の一つとして、私の随筆集を翻訳し、日伯両語を一冊にまとめたい、という申し出である。

翻訳を野尻アントニオ氏にお願いしたところ快く引き受けて下さっている、という。

望外の喜び、という言葉がこの時ほど心に泌みたことはない。

その後の大井セリア編集長と野尻アントニオ氏お二人の並々ならぬ熱意と協力には只々頭が下がるばかりである。

野尻氏の流麗な訳によって再生する私の長い間の思いが、ブラジル生まれの子や孫らに読まれる、ということに、いささかの羞恥と深い喜びを感じている。

終りに日伯毎日新聞社、大井セリア編集長、野尻アントニオ氏、美しいイラストを描いて下さったルビー・イマニシ氏に満腔の謝意を捧げます。

一九九四年二月

弘中千賀子

いのち折々

刊行責任者

装丁

イラスト

製版

印刷

発行元

セーリア・アベ・オイ

アンドレー・ヒヤクタケ

ルビー・イマニシ

ボ語 日伯毎日新聞社

日語 アレッツ

日伯毎日新聞社

サンパウロ市グロリア街三三三番一階

日伯文化連盟

サンパウロ市ベルゲイロ街七二七番一階